氏名（本籍）	山上尚彦
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）
学位記番号	博甲第　9970　号
学位授与年月	令和　3　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	オタクの well-being を規定する心理社会的要因の検討

主　査	筑波大学教授	庄司一子	博士（心理学）
副　査	筑波大学教授	沢宮容子	博士（心理学）
副　査	筑波大学教授	斎藤環	医学博士
副　査	筑波大学准教授	笹原信一朗	博士（医学）

論文の内容の要旨

山上尚彦氏の博士学位論文は、いわゆる「オタク」的な傾向性を有した人々が心理社会的な不適応的問題を抱えやすいという印象が多くの人々によって共有されているという実情をふまえ、定量的な手法によってその実証を試みたものである。オタク的な傾向がある人々の well-being が一般的なそれより低い可能性を想定し、臨床心理学な観点からそれを検討するべく、オタク的な消費行動と well-being の関連を規定する心理社会的要因の検討をする事を目的としている。その要旨は以下の通りである。

研究 1 では、引きこもり的な心性がオタクに認められるか否かを検討する事を目的としている。2015 年 7 月に関東圏の国立大学における講義にて質問紙調査を実施し、276 人の大学生から回答を得ている。対象者の内訳は男性 116 名、女性 134 名、性別未回答者 17 名とのことであった。質問紙ではオタク的消費行動、自己愛、精神的回復力、異性に対する態度、友人関係および両親との関係の満足感、インターネットサービス使用頻度に関する項目を尋ねている。その結果、回答者はオタク群と非オタク群に分類され、オタク群の方が「肯定的な未来志向」と「LINE の使用頻度」が低く、「LINE を除いたチャットやメッセンジャーの使用頻度」と「ニコニコ動画の使用頻度」と「BBS（インターネット掲示板）の使用頻度」が高いという結果を得ている。

研究 2 では、オタク的な消費行動と well-being の関連が外向性や動機に応じて異なるのかを検討し、オタクの類型に応じて心理社会的特性が異なるかを検討している。2017 年 11 月から 2018 年 5 月にかけて、オタク的なコンテンツに関する教育と交流が豊富な通信制高等学校の 426 名に対して、オンライン上で質問紙調査を実施している。回答者の内訳は男性 180 名、女性 246 名、平均年齢は 16.45 歳とのことであった。著者は質問紙で、オタク的消費行動頻度、オタク的消費行動の動機、ポジティヴ情動（PA）とネガティヴ情動（NA）、インターネット行動、孤独感、外向性、ソーシャル・サポート尺度、状態自尊感情尺度、絶望感、首尾一貫感覚：SOC-13 に関する項目を尋ねている。その結果、外向性に応じてオタク的消費行動の影響が変化する傾向は認められず、オ

タク消費行動頻度が上昇するほど孤独感、絶望感尺度、PA も上昇する回帰式が得られたとしている。また、心理的な葛藤回避的動機と「NA」、SOC-13 の「把握可能感」、「処理可能感」との間に有意な相関が認められ、話題共有の動機と「PA」及び孤独感との間に有意な相関が認められたとしている。

さらに著者は回答者を「オタク群(男性 37 人、女性 55 人)」、「ライトオタク群(男性 90 人、女性 123 人)」、「非オタク群(男性 53 人、女性 68 人)」に分類して統計的に比較した結果、以下の結果を得ている。すなわち、外向性はオタク群がライトオタク群より高く、PA はオタク群がライトオタク群と非オタク群より高く、絶望感はライトオタク群が非オタク群より高く、「大切な人のサポート」はオタク群が非オタク群より高く、「面識無し友人サポート」はオタク群がライトオタク群と非オタク群より高い。インターネット行動の「自己表出」はオタク群がライトオタク群より高く、ライトオタク群は非オタク群より高い傾向がある。インターネット行動の「他者との関係」はオタク群がライトオタク群より高く、ライトオタク群は非オタク群より高い。インターネット行動の「現実とのバランス」はオタク群、ライトオタク群、非オタク群の順で高い。自尊感情は非オタク群がライトオタク群より高い傾向がある。「処理可能感」は非オタク群がオタク群より高く、ライトオタク群より高い。

研究 3 では、オタクのインターネット依存過程に特有なモデルがあるかを検討している。2020 年 7 月にオンライン上にて 16 歳以上を対象に公募による調査を実施し、1115 名からオンライン上で回答を得ている。対象者の内訳は、男性が 427 名、女性が 630 名、性別無回答者が 58 名、平均年齢が 37.5 歳とのことであった。著者は調査で、オタクを分類する為の項目、不適応的認知、オタク的なコンテンツに関係する病的インターネット使用（オタク的 SPIU)、全般的な病的インターネット使用（「GPIU」)、SNS 依存、ソーシャルサポートの項目に関して尋ねている。

著者はさらに回答者をオタク群と非オタク群に分類し、統計的に比較している。その結果、オタク群は GPIU・オタク的 SPIU・不適応的認知が高く、ソーシャルサポートが低い傾向を認めている。また、オタク群においては「全般的な不適応的認知」よりも「インターネット不適応的認知」の方がオタク的 SPIU を全体的に予測しやすいとしている。また、オタク群において SNS 依存を予測する場合には全般的な不適応的認知は関与せずインターネット不適応的認知が強めの予測因子となり、家族サポートの不足と面識のある友人サポートの自覚も予測因子になるという結果を導いている。さらに、オタク群の GPIU の予測に関しては、オタク群と非オタク群でその予測のされ方は殆ど同等であったとしている。

以上の結果から、著者は以下のように考察している。オタクは悲観的な態度に陥りやすく、インターネットを多目的に依存的に用いる傾向がある。また、インターネットに関係する不適応的認知がオタクのインターネット依存の予測因子となりやすい。さらに著者は、研究 2 と研究 3 でオタクのソーシャルサポートの多寡に矛盾がある点を考察し、これがサンプルの性質の差異によって生じたものとしている。その上で、オタクは同好の者同士の交流機会が用意されていたり、交流機会によって外向性が獲得されたりすることで、悲観的な認知が低減してソーシャルサポートの実感が高まると考察している。以上の考察に基づき、著者はコミュニティアプローチの観点から具体的に必要な介入として、自身のインターネット依存傾向やその問題点を話し合う事や、自身の不適応的認知に焦点化するようなグループワークを例として挙げていれる。

審査の結果の要旨

（批評）

山上尚彦氏の博士学位論文は、これまで定量的な先行研究がほとんど存在しなかった、いわゆる「オタク」的な人々の心理社会的な特性を、定量的な手法で検討したという点にまず意義があると考えられる。非社会的で不適応的問題を抱えた人々という偏見に対して、非オタク的な人々と大きな差異がないことを示しつつ、あえて不適応的な側面にもアプローチを試み、特に well-being という視点から、交流機会やコミュニティアプローチといった介入手法の有効性を示唆するなど、今後のオタク研究に寄与するところの大きい研究である。

令和 3 年 1 月 15 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明

を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

　よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。